

令和3年度(第72回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	竹本 千歳太夫	竹本千歳太夫氏は、文楽公演「ひらかな盛衰記」神崎揚屋の段において、傾城梅ヶ枝が、恋人の出陣のためなら自分は地獄に落ちてもいいとの必死の一念を、魂が嘔きこぼれるような迫力ある語りで描き、物語の奇跡を観客に信じさせる見事な浄瑠璃を披露した。ほかにも「生写朝顔話」宿屋の段、「彦山権現誓助剣」毛谷村の段などで芸の幅広さを示した。深い解釈、高い技量に近年は風格も加わり、その語りは義太夫節の神髄に迫るものである。
演劇	マキノ ノゾミ	文学座に書き下ろした「昭和虞美人草」は、夏目漱石が明治末期に書いた小説「虞美人草」をベースに、時代を戦後の高度経済成長が曲がり角を迎えた1973年に置き換えた戯曲だ。マニャックなロック雑誌を作る若者たちが、理想と現実のはざままで葛藤しながら大人へと成長していくさまが、軽妙な筆致で描かれる。国家や文明への深く鋭いまなざしは普遍性を帯び、原作でも有名な「真面目になれ」の説教は、混迷するコロナ禍の現代に刺さる名場面となった。
映画	江川 悦子	俳優の全身、一部を実際に変身させる特殊メイクを立体美粧と命名した江川悦子氏は、アメリカで学んだ後昭和61年に開業し、以来35年を超えて監督らの強い信頼を得ている。令和2年「日本独立」でまさに俳優を役に変身させた氏は、令和3年「信虎」では特殊メイク・スーパーバイザーとして、時代劇のかつらにラテックス製の羽二重を改良使用し、デジタル撮影に比べると同時に、装着によるストレスを無とする画期的な技法を結実させ、時代劇撮影に革命をもたらした。同年「マスカレード・ナイト」では主要キャストの仮面をデザイン・型取りして作成した。
映画	濱口 竜介	濱口竜介氏は非職業俳優の起用やドキュメンタリー作品製作などを経て、独自の演出方法を確立している。令和3年には2作品が公開され、「偶然と想像」では人間関係の中に潜む驚きを皮肉と愛を込めて活写し、「ドライブ・マイ・カー」では映画と小説と演劇の三位一体を実現させながら、映画のリアリズムを高度な次元に引き上げた。それぞれベルリンとカンヌという重要な国際映画祭で受賞しており、現在の日本映画を牽(けん)引する存在である。
音楽	妻屋 秀和	妻屋秀和氏は日本を代表するバス歌手である。恵まれた才能とヨーロッパの歌劇場で培った豊かな経験を生かしつつ、長年、新国立劇場をはじめとする多くの舞台で常に存在感を示し、公演の成功に貢献してきた。令和3年はとりわけ活動が顕著で、コロナ禍で来日しなかった外国人歌手に代わっていくつかの主役級の役も高水準でこなし、その実力を広く再認識させた。なかでも新国立劇場「ドン・カルロ」におけるフィリッポ二世の圧倒的な歌唱は印象的であった。
舞踊	上野 水香	類いまれなプロポーションと柔軟性、個性的な面差しの上野水香氏は、牧阿佐美バレエ団においてのデビュー当初から東京バレエ団プリンシパルである現在に至るまで、常に第一線で活躍している。令和3年は、長年踊ってきたベジヤール振付「ボレロ」で新境地を拓(ひら)き、アロンソ振付「カルメン」の表題役をより深い表現力で演じ、「海賊」のメドーラ役では華やかな存在感で全幕のドラマを牽(けん)引。トップ・ブリマの圧倒的な輝きを放ち続けた。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	奥村 康祐	奥村康祐氏は、国際コンクールでの入賞を重ねた後に新国立劇場バレエ団に入団。バレエ芸術の根幹をなす品位ある立ち居振る舞いにとりわけ優れ、新国立劇場バレエ団の主要なレパートリーに次々と主演してきた。今年度は古典名作「白鳥の湖」「ライモンダ」で踊りのスケールや力強さ、心理表現に著しい進境を示し、現代作品においても繊細な感性の光る名演が続いた。日本を代表するダンスール・ノーブル(貴公子ダンサー)の一人であり、さらなる活躍を期待させる。
文学	中島 京子	中島京子氏は、これまで多彩な題材に取り組み数多くの上質な作品を発表してきた。本年刊行された「ムーンライト・イン」「やさしい猫」は、ともに親しみやすい文体ながらも、介護、認知症、家族関係、外国人などを巡(めぐ)る令和の日本の抱えた現実を取り上げ、問題提起していく姿勢が頼もしい。人生の岐路に立った人々の再生、あるいは一人の少女の成長の物語を、ときにユーモア、ときに不可思議な色合いを交えて描き出す卓越した筆致と作者の温かな眼(まな)差しは、多くの読者に希望を与えるものだろう。
文学	水林 章	物語は第二次世界大戦直前の東京で始まる。孤児となった少年・礼は、縁あってフランスで育ち、優秀な弦楽器職人となった。彼が胸に秘め続けた願いは、かつて無残に壊された父の遺品のヴァイオリンを修復することだった。楽器が本来の響きを取り戻すとき、音楽への愛で結ばれた人々の絆(きずな)も時代を超えて蘇(そ)生する。水林章氏は本書をフランス語で書下ろし、フランスで好評を博したのち自ら日本語に訳出した。清冽(れつ)な傑作の見事な越境を寿(ことほ)ぎたい。
美術	鷹野 隆大	鷹野隆大氏は日本の男性写真家としては珍しく、ジェンダーやセクシュアリティを攪拌(かくはん)する作品で知られる。しかしそれは彼の試みの一部分にすぎない。国立国際美術館で開催された「鷹野隆大 毎日写真1999-2021」展は、写真という媒体の可能性と限界に挑戦するこの作家の力量を余すことなく伝える機会となった。1998年から続けている「毎日写真」を中心に、日本の無秩序な町並みや影を映した作品等、テーマも様式も多岐に及ぶが、一貫して制度化された眼(まな)差しについて思考し、それに対する疑問を提示し続けている。
放送	磯山 晶	磯山晶氏は主に脚本家の宮藤官九郎氏とのコンビで「木更津キャッツアイ」「タイガー&ドラゴン」といった作品でテレビドラマ界を牽(けん)引してきた。常に観(み)たことのない面白さに溢(あふ)れたドラマを制作し、次に何を企(たくら)んでいるのか楽しみな制作者であり、若いドラマ制作者にとっては憧れの存在である。 令和3年1月期に放送された「俺の家の話」は、プロレス、能、という連続ドラマではなかなか登場しない素材と、重くなりがちな「親の介護」というテーマを見事に融合させ、しかも笑えて泣けて心に刻まれる名作へと昇華させた。このドラマを企画、成立させ、令和3年を代表する人気ドラマとして世に送り出した氏の功績を称(たた)えたい。
大衆芸能	桂 南光	還暦からの10年間、江戸落語を上方流に仕立て直したり、従来のオチを時代の変化を鑑み改作したりと、納得のいく南光落語を構築。古希記念の全国ツアー楽日で披露した「らくだ」は、その集大成とも言える。性善説を下敷きに、生きることの刹那や人情の機微を押しつけがましくない描写で体現しながらも、観客の心に温(ぬく)もりを残す。緩急の効いた滑稽噺から、人情味ある噺までを、上方の匂いと共に伝える噺の匠は充実の時を迎えている。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	佐野 元春	1980年にデビューしてから40年以上。コロナ禍にあっても活動への熱意を失うことなく、現役感たっぷりに新曲リリースを重ね、日本武道館や大阪城ホールなど大会場も含むライブにも挑み続けた。と同時に、デビュー以来24年にわたったエピックレコード在籍時の全アルバムを網羅する充実のCD29枚組「THE COMPLETE ALBUM COLLECTION 1980-2004」も編纂。いつの時代も変わらず、鋭い眼(まな)差しと瑞々(みずみず)しい感性で日本のポップ音楽界に有効な方法論を提示し続けてきた自身の「現在」と「過去」を集大成してみせた。
芸術振興	川口 隆夫	COVID-19感染拡大により舞台公演の多くが中止された令和3年、川口隆夫氏は「TOKYO REAL UNDERGROUND」、「INOUTSIDE」フェスティバルのディレクターや共同企画者を務めた。それらは地下空間での通常ではあり得ない演出、国際的なアーティストや異なる分野の研究者たちを交えたトーク、ワークショップなどを通してパンデミックという非常事態をポジティブに捉え直す貴重な機会となった。それはまた生命としての身体を見つめ、逃れがたい病や死を「表現」によって受け止めようとする芸術の在り方を問い直す、ダンスというジャンルを超えた表現者としての挑戦そのものであった。
評論等	三浦 篤	19世紀後半から日本美術に触発されて、欧米各国に広範に波及したジャポニスム。一方、明治日本には西欧、とりわけ西洋画においてはフランスから美術文化が流入する。フランス近代美術史研究の第一人者三浦篤氏は、本書において、長年の研究を土台に、双方向的な視点から移植と選択的摂取を論じる。卓抜な三部構成、すなわちフランスと日本、そして両者の架け橋となった画家コランを間にはさんで考察し、これを説く的確な文体により秀逸な結実をもたらした。
メディア芸術	小島 秀夫	「DEATH STRANDING」は、規模の大きさ、作り込みの深さ、クオリティの高さは、もちろんだが、その上で作家性が発揮された「顔」の見える作品であることに感動するのだ。大災厄によって崩壊したアメリカを舞台に「運び屋」となって分断された社会を繋(つな)げていくというミッションと、オープンワールド上で見えない誰かと間接的に協力するメカニクス。インタラクションのダイナミズムを、戦いではなく、繋が(り)ストランド)によって体現させた。1987年の「メタルギア」から一貫して、既存のセオリーを超えるゲームでありながらゲームでのみ可能な方法で世界を示し続けてきた小島秀夫氏だからこそ到達できた境地である。

令和3年度(第72回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	尾上 松緑	松羽目物の所作事「土蜘蛛」は、祖父も父も当たり役とした、いわば家の芸である。五月歌舞伎座における所演は、前半の陰鬱な雰囲気の出にすぐれ、松羽目物の格調を踏み外さない的確な舞踊表現、後半の怪異の表現のスケールでも、大きな進歩のあとをみせた。「太刀盗人」の巧まざるおかしみ、「人情断文七元結」の男気の表現にも進境がみられる。古典歌舞伎に軸足を置いて、流行に左右されない篤実な歩みも注目に値する。修行の成果はすでに中堅の位置に迫るが、さらなる結実を祈念して、これまでの精進を讃(たた)えたい。
映画	吉田 恵輔	吉田恵輔氏は、これまで注目すべき作品を手がけてきた映画監督である。令和3年の「BLUE／ブルー」は負け続けながらも挑戦するボクサーを描き、また「空白」は万引きを疑われて事故死した娘への思いを抱く父親の不条理な感情を描いて、その優れた資質を示した。ともにオリジナル脚本と意欲的な演出によって、ともすれば事の顛(てん)末の白黒を簡単に定めがちな社会のあり方を問いながら、主人公たちの生き方を感情の機微を通してリアルに描き出した刺激的な創作活動は評価に値する。
音楽	本條 秀慈郎	本條秀慈郎氏は、三味線演奏家としてすでにジャンルを超えた活動を続けているが、特に令和3年の「微かに…高橋悠治と三味線三夜」と題したりサイタルにおいて非常に内容の濃い演奏を聴かせた。3夜(昼夜同演目の6公演)にわたる演奏は、独奏曲のほか、各回に義太夫三味線、京都の柳川三味線、ピアノとの共演というバラエティに富んだ演目を含み、これまでに磨き上げられてきた技量は、三味線という楽器に希望に満ちた未来を拓(ひら)いた。
舞踊	井澤 駿	井澤駿氏は、平成26年新国立劇場バレエ団に入団、早々に主役デビュー。令和3年もダンスール・ノーブルタイプのダンサーとして、フレッシュな感性、高度のテクニックと表現力を生かし、5作品(配信含む)に主演し成果を上げた。特に「白鳥の湖」ではエレガントで品格ある技術と自然体の演技で、王子の愛と憂いをドラマチックに演じ切った。古典バレエから現代バレエまでレパートリーの幅を拡(ひろ)げており、今後更なる飛躍が期待される。
文学	堀田 季何	〈戦争と戦争の間の臃かな〉〈斑蝶斑蛾斑蝶斑〉。堀田季何氏の俳句は極楽の文学、花鳥諷詠へのアンチテーゼである。独自の毒の花に匂い立つ夢魔の香は、やがて痛切に哀(かな)しい。なぜならその花は鉱石で出来ているから。本句集は自己陶醉に陥らず、認識を研ぎ澄ました批評哲学の結晶である。〈人間を乗り継いでゆく神の旅〉〈吾よりも高きに蠅や五六億七千萬年(ころな)後も〉。人間の卑小さへの洞察が悠久の文明批評になった句群は、芭蕉が拓(ひら)いた地平を抜け、アフターコロナの新たな世界像を提示している。
美術	四代 田辺 竹雲斎	四代田辺竹雲斎氏は、代々竹工芸を営む家系に生まれ、伝統的な修行を積むことにより、伝統技法を生かした竹工芸の器などの作品を作る。その作品は、伝統的な機能性を追求しながらも、伝統的形からモダンデザインの領域に達し、竹工芸家としても日本を代表する作家となっている。しかし彼は竹工芸家の伝統的な活動の枠を大きく飛び出し、世界中で竹を使った壮大なインスタレーション制作を展開している。その活動は竹工芸家としての領域を超越し、美術家として、更なる新しい領域へ広がりがつある。もしかすると、素材も竹にとどまらず、空間も室内に納まらなくなるにちがいない。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
美術	山城 知佳子	東京都写真美術館での「山城知佳子 リフレーミング」展は、作家の公立美術館初個展として、2002年の《BORDER》から最新作《リフレーミング》までが展覧された。山城知佳子氏は生まれ育った沖縄の風土と歴史、政治的状况に対峙(じ)し、時に俯瞰(ふかん)的で批評的な視点によって、大胆な物語性が迸(ほとぼし)る映像・写真作品を創出してきた。様々な次元で自覚される境界を、身体感覚に訴えかけて突破しようとする創作は、氏の誠実と力強さとして、説得力をもって評価された。
放送	安達 奈緒子	脚本家・安達奈緒子氏は、これまでも「透明なゆりかご」、「きのう何食べた?」、「サギデカ」などの繊細で情感豊かな脚本により、高く評価されてきた。NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」では、安易な相互理解や主人公のわかりやすい成長を描くのではなく、東北と東京を舞台に、非当事者が被災者に寄り添うとはどういうことかを誠実に突き詰めた脚本を執筆し、東日本大震災から十年という節目にふさわしい、秀逸なドラマを生み出した。
大衆芸能	藤井 風	2010年、12歳の時から動画配信サイトに投稿し続けてきたピアノ弾き語り映像が話題を集めデビューに至った経緯も含め、まさに今どきの新人音楽家。自作、カバーにこだわらず、いい曲を豊かな歌心と優れた技能でまっすぐ聞き手に伝えるという、基本的な、しかし誰もがふと忘れがちなポップ音楽の美学を今改めて、フレッシュな感性で全うしようとする姿勢が爽快だ。2021年には動画サイト登録者も100万人超え。無観客野外ライブの全世界生中継や全国ツアーも成功。NHK紅白歌合戦への出演も好評を博した。複雑化したシーンに文字通り新風を吹き込む存在として評価したい。
芸術振興	中村 茜	中村茜氏は、岡田利規、矢内原美邦らアーティストらと演劇・舞踊・美術等のジャンルを越境するプロジェクトを仕掛けてきた。令和3年は、「誰もが、いつでも、どこからでも繋がれる劇場」とをバリアフリー型動画配信事業THEATRE for ALLを立ち上げ、またTrue Colors Festivalにおいてダイバーシティをテーマに多国籍のアーティストや多様なシニアたちとドキュメンタリー演劇に挑むなど、コロナ禍でも舞台芸術のすそ野の拡大に果敢に取り組む姿勢を評価し今後のさらなる活躍を期待したい。
評論等	遠山 純生	アメリカ映画史といえば、巨匠から巨匠へという峰を伝うのが定石だが、遠山純生「〈アメリカ映画史〉再構築」は、意識的な現実性の探求という新たな切り口から見直す力作である。出発点は1920年代の社会的リアリズムの写真家と映画人が開発し共有したモンタージュの技法で、記録映画と実験映画、テレビやニュースを横断しながらスピルバーグらの大型SF映画までたどり着く。撮影や照明機材の開発とその利用技術の考察も鋭い。結論部の弱さが惜しまれるが、それは次に克服されるとの期待をこめて新人賞を授与する。
メディア芸術	よしなが ふみ	「大奥」は江戸時代の男女の社会的役割を逆転し、時代劇をパロディ化したSF大作。令和3年2月完結した。「きのう何食べた?」は、青年誌でゲイカップルの日常をあたりまえのように描き続けてきた連載中の作品。ともに、時に鋭く時に優しくジェンダーロールへの問いを投げかけ、固定化した社会的価値観の変化を促す役割を果たしている。よしながふみ氏が私たちに示し続ける新しい地平を高く評価し、文部科学大臣新人賞を贈賞する。